あゆみ

第６１号

令和６年度

秋田県立大曲高等学校

あ ゆ み

第６１号

目　　次

【巻頭言】
時代とともに学ぶ ･････････････････････････････････ 校長　渡 部　剛 ･･･ ３

【研修記録】
初任者研修を終えて ･････････････････････････････････････ 渡 邉　雄 大 ･･･ ４
鈴 木　邑 ･･･１０
実践的指導力習得研修（採用３年目）を終えて･･････････････････ 佐 川　恭 太 ･･･１５
実践的指導力向上研修を終えて ･････････････････････････････ 三 浦　俊 喜 ･･･１８
三 浦　史 聖 ･･･２１
中堅教諭等資質向上研修を終えて ･････････････････････････ 佐々木　悠華 ･･･２５
英語科「英語コミュニケーションⅠ」学習指導案･････････････････ 伊 藤　孝 紘 ･･･２７

【学科】
令和６年度　商業科の取り組み ･････････････････････ 商業科　高 橋　晃 ･･･３４

【トピックス】
デジタル探究について･･････････････････････････････････････ 三 浦　史 聖 ･･･３５

表紙題字
竹村　美範（天祐）

時代とともに学ぶ

校長　　渡　部　　剛

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」
　これは初代ドイツ帝国宰相ビスマルクの格言です。歴史とは、それぞれの時代で繰り広げられた理論と実践の往還の果てしない積み重ねであり、伝承のツールとしては書物や口伝、格言や諺など多岐にわたりますが、広義には研修もその一つに含まれると考えます。

　近年はこれまで経験したことのないような劇的な変化が急速に進み、不確実で複雑、不透明で曖昧な社会情勢はＶＵＣＡ（ブーカ）の時代と言われています。多様化が進み、社会の価値観、教員の置かれている立場も必要とされる力も大きく変わりました。教えるのが好きで教員になったという人も多いかと思いますが、今では「生徒の自走化」と「教員の伴走」という言葉に代表されるように、教員にはあまり教え過ぎず、生徒の主体的な学びを支援する伴走者としてのファシリテーション力を身に付けるように言われています。いつの時代も不易の部分については教師の矜持として忘れてはいけないところですが、一方で時代によって必要とされる力については、研修等を通じてしっかりとした学びを積み重ねていかなければなりません。

　さて、時代の変化に伴い学校が対応する課題の複雑化、困難化が進んでいます。これまでは「以前はこう対応した」「こう教えた」「こうしてきた」という経験が当てはまる事案も多くありましたが、これまで蓄積してきた財産だけでは対応できなくなってきていると実感しています。例えば、ここ数年とみに「令和の日本型学校教育」という言葉を耳にするようになりましたが、中教審では、従来の日本型教育を発展させた「新たな学校教育を実現する」とはっきりと明示しています。その中では「すべての子供たちの可能性を引き出す『個別最適な学び』と『協働的な学び』の実現」であったり、教師に共通的に求められる資質の具体として、①教職に必要な素養②学習指導③生徒指導④特別な配慮や支援を必要とする子供への対応⑤ＩＣＴや情報・教育データの利活用の５項目が挙げられたりと、従来とは大きな変化が見られます。また、生徒指導においても、２年前に 12 年ぶりに生徒指導提要が改訂されていますが、この中では「２軸３類４層」に構造化された手法による積極的な生徒指導の充実が改訂のポイントとして挙げられています。いじめや不登校もこうした手法で対応することが求められています。これらのように、時代の節目、コロナ禍を契機に教育環境は大きく変わり、自ら学びを求めない限りガラパゴス教員となってしまいます。教育環境・手法の変化に我々教員は常にフレキシブルに対応していかなければならず、理論と実践の往還を繰り返しながら、「教員は絶えず研究と修養に努めなければならない」という言葉の重みを今まさに感じています。

　先日、ある新聞に、「若手社員の挑戦に関する意識調査」が掲載されていました。記事によると、東京商工会議所が約５,６００社を対象にしたアンケートで、入社３年目以内の若手社員の６１．８％が「上司・先輩が挑戦していないとモチベーションが下がる」と感じており、６７％が、「挑戦している上司・先輩と働きたい」と回答をしていたということでした。そして、「上司（先輩）の挑戦と、若手の成長実感には強い結びつきがある」ということで、「部下の成長実感を高めるためには、上司（先輩）が挑戦している姿を見せることが大切だ」と結論付けていました。学ぶことは挑戦することです。あらゆる学校業務において、若手、中堅、ベテラン、それぞれ一人一人の学びの積み重ねが歴史となり、その連なりの中で多くの賢者が生まれ、それが教師個人の資質・能力の向上のみならず、学校全体、ひいては県学校教育全体の発展につながるものと思っています。

　結びに、この研究収録「あゆみ」の原稿執筆や編集に携わっていただいた先生方に感謝いたします。また、私たちの研究についてお読みになっていただいた方におかれましては、多方面から御教示いただければ幸甚に存じます。

初任者研修を終えて

芸術科・音楽　渡邉雄大

１　校内研修について

校長先生、教頭先生、事務長をはじめとする多くの先生方にご指導いただいた一般研修では、教員としての資質に関わることや法律に関わること、各分掌や実務に関わることなど、多岐にわたる内容について学ぶことができた。ついこの間まで学生だった人間の感覚からすると、「先生って授業や部活以外に何をやっているのだろう」という疑問を抱いていたが、あらゆる教育活動が成立するために必要な業務がたくさんあり、校内外のさまざまな方々との関わりや幅広い教育的知見が重要なのだと、一般研修を通して知ることができた。一般研修で学んだことを忘れず、教員として益々成長していきたい。

教科研修では、指導教員である竹村美範先生と教科指導員である阿部教頭先生に、教科指導において大切なことをたくさん教えていただいた。授業準備から授業進行、そして評価に至るまであらゆるノウハウを教えていただいたが、教科研修の後はいつも「芸術科（音楽）教員としてどうあるべきか」について考えることが多かった。

竹村美範先生は芸術科教員について「クリエイティブな仕事」であると仰っている。示範授業を参観させていただいた際は、自らが表現者として生徒の前に立ち、生徒を楽しませるだけでなく先生自身も楽しんで授業をしている姿を見ることができ、「教員って面白い仕事なんだ（面白くなくてはいけないのだ）」と改めて感じた。

また、阿部教頭先生は、音楽を愛する者として、音楽を専門とする者としての教育的信念が、言葉のひとつひとつに表れているところに、いつも感銘を受けている。高校で音楽を選択してくれた生徒たちに何を体験し学ばせてあげられるか、その生徒が授業後にどういう姿でいてほしいか、その視点を与えてくださったことで、授業づくりの際の考え方も大きく変化していった。「雄大イズムを大切に」と言ってくださったことも、どういう教員でありたいかを考える大切な柱となっている。

竹村美範先生、阿部教頭先生、本当にありがとうございました。

２　校外研修について

４月１日の教職基礎を始めとして、総合教育センター主催の講座Ⅰ～Ⅹ（講座Ⅱは高校教育課と合同実施）、高校教育課主催の「PA 研修（宿泊）」「生徒理解」「特別支援学校訪問」と、計 15 日間校外研修を受けさせていただいた。どれも貴重な研修で大変勉強になったが、特に印象に残っているのは、総合教育センターでの教科研修である。

総合教育センターでの教科研修は、そのほとんどが鈴木智美総合教育センター指導主事との一対一で行われた。学習指導要領の内容や指導と評価の一体化など、教員採用試験ではただ「分かる」段階であった事項を、実際の授業を想定してどのように実現するのかということについて、たくさんのことを教えていただいた。また、一対一をいいことに、実際に授業をしていて思った疑問や悩みについてどんどん質問し、解決に向けた方針が見つかる時間でもあった。本校で行われた講座Ⅷ期に向けた教材研究や指導案作成においても、多くの時間を割いてご協力いただいた。

鈴木智美指導主事、感謝申し上げます、ありがとうございました。

３　おわりに

大学を卒業して、憧れであった高校の音楽の先生になって、初めて生徒と授業をしてから、早くも１年が経とうとしている。あっという間に過ぎていく生徒との日々を、より大切に過ごしたいと思う。

「右も左も分からない」とはまさにこのことかと実感させられる日々だったが、多くの先生方に支えていただきながら、ひとつひとつの仕事に向き合うことができた。「毎日が初任研」と先生方に言っていただき、分からないことは手取り足取り教えていただいたことで、学びある毎日を過ごすことができた。

この１年、私の初任研に関わり支えてくださったすべての方々に、この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

これからも教員としてどうあるべきか、自分の信念をもって教育活動にあたりたい。

芸術科（音楽Ⅰ）学習指導案

日　時：令和６年 10 月 23 日（木）５校時
場　所：音楽演習室
対　象：14Ｒ　19 名（男子 10 名、女子９名）
授業者：渡邉　雄大
教科書：『音楽Ⅰ　Tutti+』（教育出版）

1　題材名　イタリアの歌曲を歌おう

2　教材名　『Caro mio ben』（作詞：不詳、作曲：G.ジョルダーニ）

3　題材の目標

（1）言葉の特性と曲種に応じた発声との関わり、曲想や表現上の効果と音楽の構造との関わりについて理解するとともに、曲にふさわしい発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能を身に付けることができる。（知識及び技能）

（2）音色、リズム、速度、旋律、強弱、構成を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように歌うかについて表現意図をもつことができる。（思考力・判断力・表現力等）

（3）イタリア語の特性などを生かした歌唱に関心をもち、主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組む。（学びに向かう力、人間性等）

4　題材と生徒

（1）　題材観

本題材は、高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）の芸術「音楽Ⅰ」における「A 表現」(１)歌唱のア、イ(ア)(イ)、ウ(ア)、及び〔共通事項〕(1)アが示す音楽を形づくっている要素のうち、音色、リズム、速度、旋律、強弱、構成について指導するものとする。

教材曲である『Caro mio ben』は、愛する女性への思いを恋い焦がれる男性がひたむきに訴えかける、イタリア古典歌曲の代表的作品である。イタリア語の響きや歌詞の内容、旋律の流れ、速度や強弱の変化との緻密な関わりを味わうことのできる作品といえる。イタリア歌曲の歌唱を通して、無理のない自然で豊かな発声を身に付けるとともに、音楽を形づくっている諸要素の知覚・感受を支えに歌唱表現を創意工夫できるようにすることをねらいとする。

（2）　生徒観

歌唱のみならず、さまざまな音楽の活動に意欲的に取り組んでいるクラスである。特に教材曲に触れてイメージを膨らませ、それを伝え合う活動に対して、より積極性

を示している。しかし、膨らませたイメージを、音楽を形づくっている要素と関わらせて音楽表現に生かすことには課題がある。

（3） 指導観

第１時では、イタリア語の歌詞の読み方や大まかな意味について知り、『Caro mio ben』の曲全体の雰囲気を掴むことを通して、イタリア歌曲の歌唱に対する関心をもつことができるようにする。

第２時では、『Caro mio ben』の主人公の気持ちに着目するとともに、中盤の旋律の流れや強弱の変化、序盤と終盤の違いを意識しながら、どう歌うかについて表現意図をもつことができるようにする。

第３時では、歌唱のテストに向け、自然で無理のない発声で歌うことや、第２時でもった表現意図をもとに歌唱表現を創意工夫することをねらい、グループで練習を行う。

第４時では、２～３人ずつで歌唱のテストを行い、歌唱における技能や表現力を評価してフィードバックをし、生徒の自己内評価につなげる。

5　題材の指導計画（総時数４時間）

第１時	イタリア語の読み方を知り、「Caro mio ben」の雰囲気を掴む。
第２時 （本時）	「Caro mio ben」の主人公の気持ちと音楽の特徴との関わりについて理解し、表現意図を持つことができる。
第３時	自然で無理のない発声を身に付け、表現意図をもとに歌唱表現を創意工夫することができる。
第４時	歌唱テスト

6　題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知曲想と音楽の構造や歌詞との関わり、言葉の特性と曲種に応じた発声との関わりについて理解している。 技曲にふさわしい発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能を身に付け、歌唱で表している。	思音色、リズム、速度、旋律、強弱、構成を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるとともに、どのように歌うかについて表現意図を持っている。	態イタリア語の特性などを生かした歌唱に関心をもち、主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。

7　本時の計画（本時２/４時間目）

（１）　本時の目標

「Caro mio ben」の主人公の気持ちと音楽の特徴との関わりについて理解し、表現意図を持つことができる。

（２）　本時の展開

時間	学習活動	教師による支援 評価規準
導入 10分	1　ストレッチを行い、『コンコーネ 50 番 No.2』と『Caro mio ben』を歌う。 2　前時の学習の確認として、歌詞の音読をする。	・　歌う際の身体の使い方について確認させる。 ・　音読の音源を再生し、正しい発音やアクセントを確認させる。 ・　歌詞の内容に着目させ、本時の目標につなげる。
	主人公の気持ちと音楽の特徴との関わりについて理解し、 どう歌うかについて思いを持つことができる。	
展開 35分	3　歌詞の内容から、主人公の気持ちについて考える。 4　３を踏まえて、場面ごとの音楽の特徴との関わりを捉える。 〇場面②の旋律の流れや強弱の変化について着目し、どう歌うかについて思いをもつ。 〇場面①と場面③の違いに着目し、どう歌うかについて思いをもつ。 5　４での活動を踏まえて、実際に斉唱する。	・　「crudel」の意味について、補助的に説明を加える。 ・　速度記号やポルタメントについて説明する。 ・　装飾音符やフェルマータについて説明する。 【評価規準】 「Caro mio ben」の主人公の気持ちと、音楽の特徴との関わりについて考え、表現意図を持っている。（ワークシート・発言） ・　全体で共有した考えのうち、いくつかの工夫を選択し、歌う際に意識させる
終末 5分	6　振り返りを記入する。	

主人公の気持ちと音楽の特徴との関わりについて理解し、
どう歌うかについて思いを持つことができる。

R　　番　　氏名

Ⅰ　『Caro mio ben』の主人公は、どんな気持ちでこの歌を歌っているのでしょうか？

Ⅱ　３つの場面に分けて、Ⅰを踏まえてどう歌うかについて思いや意図をもとう！

【場面の分け方】
場面①　４小節目３拍目～12 小節目２拍目　（１回目の Caro mio ben~languisce il cor.）
場面②　14 小節目３拍目～25 小節目２拍目　（il tuo fedel~２回目の languisce il cor.）
場面③　25 小節目３拍目～30 小節目２拍目　（３回目の Caro mio ben~languisce il cor.）

活動 A

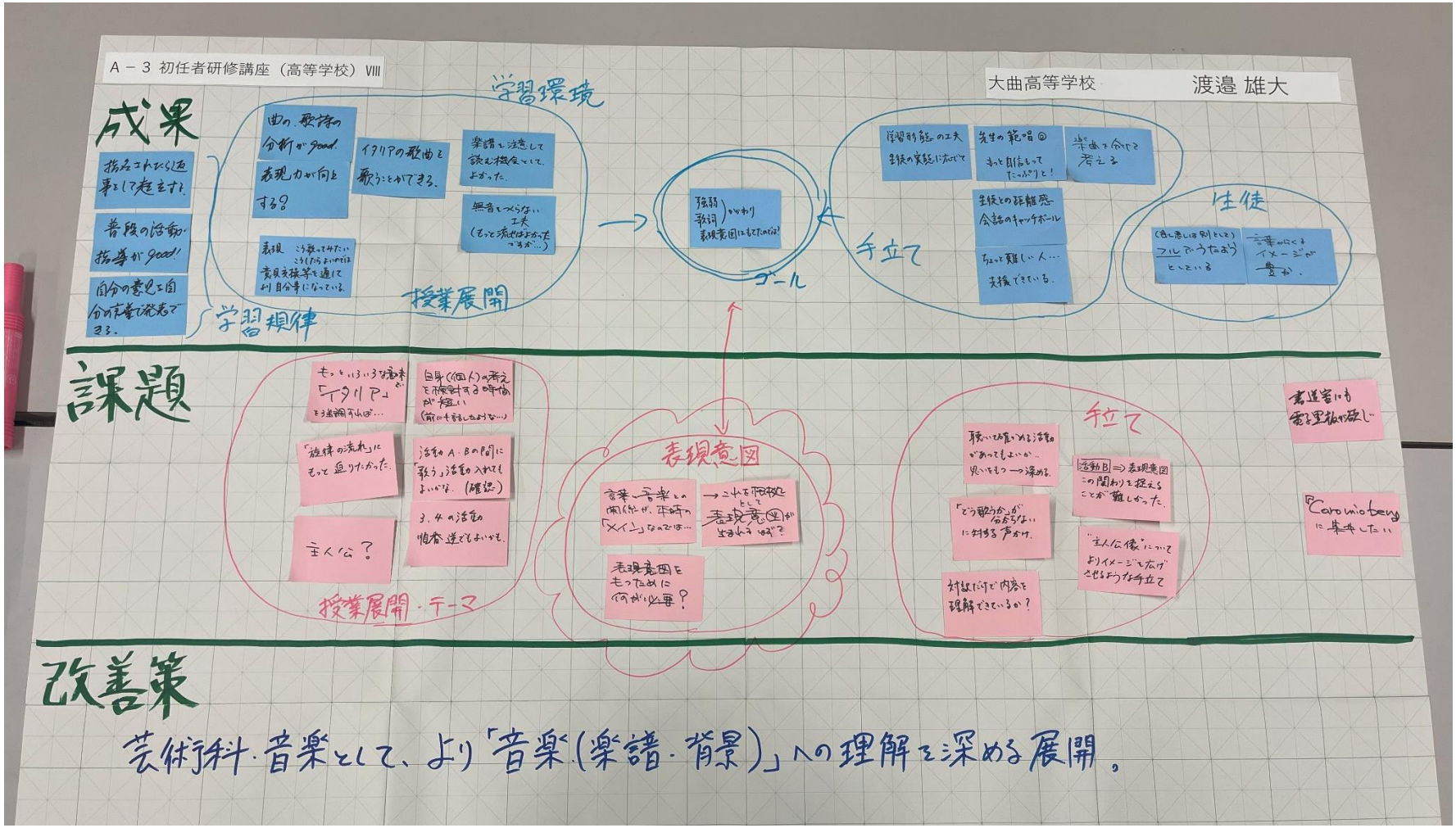
場面②の旋律の流れや強弱の変化は、主人公の気持ちとどのようにリンクしていますか？

→このことを踏まえて、どのように歌いますか？

活動 B

場面①と場面③は歌詞が共通しています。では、場面①と場面③で違う点を挙げてみましょう。

→このことを歌唱にどう生かそうと思いますか？


A－3 初任者研修講座（高等学校）VIII
大曲高等学校　渡邉 雄大
成果
指名されたら迅速として走ります。
普段の活動・指導がgood!
自分の意見と自分の言葉で説明できる。
学習環境
曲の、歌詞の分析がgood
表現力が向上する?
イタリアの歌曲を歌うことができる。
楽譜を注意して読む機会をとれてよかった。
無音をつくらない工夫（もっと流せばよかったかな…）
表現　こう歌ってみたい　こうしたらよいのでは
意見交換等を通してより自分事になっている。
学習規律
授業展開
ゴール
歌詞
歌詞
表現意図にもたためた
手立て
学習形態の工夫
生徒の実態に応じて
先生の範唱◎
もっと自信もってだこが!と!
楽曲の分析を考える
生徒との距離感
会話のキャッチボール
ちょっと難しい人…
支援できている。
生徒
（自己表現は別として）
フルでうたおうとしている
言葉からくるイメージが豊か。
課題
もっともふさわしくない歌曲が「イタリア」
もう進級不可能…
自身（個人）の考えを構築する時間が短い
（前にもあったような…）
「旋律の流れ」にもっと迫りたかった。
活動A・Bの間に「歌う」活動の入れてもよいかな。（確認）
主人公？
3、4の活動の順番逆でもよいかも。
授業展開・テーマ
表現意図
言葉・音楽との関係性が、本時の「メイン」なんでは…
→これを教材として表現意図が生まれるのでは？
表現意図をもつために何が必要？
手立て
聴いて感じられる活動があってもよいか…
見いたもの→深める。
活動B⇒表現意図この関わりを捉えることが難しかった。
「どう歌うか」が合からない に対する声かけ。
"主人公像"についてよりイメージを広げさせるような手立て
対話だけで内容を理解できているか？
高学年にも電子黒板が欲しい
Carouniobeyに基準したい
改善策
芸術科・音楽として、より「音楽（楽譜・背景）」への理解を深める展開。

初任者研修を終えて

保健体育　　鈴木　邑

１　校内研修について

一般研修については、渡部校長先生、阿部教頭先生、佐藤事務長を初めとする多くの先生方に、お忙しい中お時間を割いていただいて、研修を受けさせてもらった。教員としての使命感や服務規程、諸表簿の点検、教育法規など、教員として必要な知識を多く教えていただいた。一般研修で学んだことを心に留めて今後の教員生活に生かしていきたい。

教科研修については、指導教員である山本力先生を初め、体育科の先生方に専門的な知識や授業の進め方、評価の仕方などを教えていただいた。また、授業実践研修の際には、他教科の先生方が多く参観してくださり、多くの意見をいただいたことで多角的な視点で授業を振り返る機会となった。私自身、非常勤講師も含めれば講師経験は８年ほどあるが、改めて授業の工夫の仕方について考えることのできた貴重な時間となった。今回の経験を糧に今後もよりよい授業をするために研修に励んでいきたい。

２　校外研修について

校外研修は、4 月 1 日の教職基礎 I を始まりとして、総合教育センター主催の研修が 10 日、高校教育課主催の研修が 5 日行われた。

総合教育センターでの研修では、同期採用の先生方とグループワークをする機会も多くあり非常に有意義な時間となった。「教科」での研修では、金森道指導主事に大変お世話になった。専門が陸上ということで、以前からお世話になることが多かったが、まさかこういう形でまたお世話になるとは思わなかった。また、体育で同期採用の 2 人とは年齢も近く、業務の悩みだけではなく私生活の話などをすることも多く、この 2 人の先生と同じ時期に採用されたことには心から感謝しているし、出会いの大切さに改めて気づくことができた。講義では、金森指導主事の方から学習指導要領の要点や学習指導案作成の基本などについて詳しく説明していただき、質問にも丁寧に答えてくださったおかげで今までもっていた疑問も解決することができ、学びを深めることができた。本校でおこなわれた授業実践研修では、体育と保健の授業を実際におこなっているところを見ていただき、的確なアドバイスをもらうことができた。また、授業をするに至るまでの段階でも、学習指導案の作成や授業の工夫へのアドバイスをしていただいたおかげで、当日は自分なりに良い形で授業をすることができた。自分の授業をここまで丁寧に見ていただける機会というのは多くあるわけではないと思うので、今回の経験やアドバイスを今後の授業に生かしていけるようにしたい。

「教科外」の研修では、PA 研修と特別支援学校訪問が特に印象に残っている。PA 研修は前年度まではコロナ感染症の影響でおこなわれておらず、来年度からは名称も一新されるということで最後の PA 研修に参加できたことに感謝している。初めは、宿泊研修ということと特別支援学校の先生方とも一緒ということもあり不安があったが、一緒に寝泊まりし、食事やプロジェクトアドベンチャーを通して活動していくことで、同期採用の先生方との信頼関係や絆ができたと感じている。近年、風通しのよい職場環境作りという言葉を聞く機会が増えたように感じるが、このように同じ課題を協力して解決するような活動を積極的に取り入れ、自然に話をするような機会を作ることが重要なのだと感じた。

特別支援学校訪問では、大曲支援学校を訪問させていただき、一人一人の生徒の特性に応じた指導を見させていただき、先生方のきめ細かい指導に驚いた。また、学校経営方針の説明の中でおっしゃっていた「障害をもっていても普通に接し、助けが必要なときに助ける」という言葉が印象に残っており、どんな生徒についてもすぐに支援するのではなく、生徒の行動を我慢して見守ることの重要性に関して考えさせられた。

３　終わりに

これまでに講師経験が 8 年ほどあり、その中で担任をもたせていただいた機会もあったが、初任者研修を通して今まで曖昧なままになっていた知識がより確かな知識へと変わっていくのを実感することができた。これも校長先生や教頭先生、指導教員の山本力先生を初めとする多くの先生方のおかげである。センターでの研修では、学習指導要領の要点や学習指導案の作成についての講義があり、講師時代に疑

問を持っていた部分について詳しい説明を聞くことができたりと、今後に生かすことのできるような実践的な知識を多く学ぶことができた。また、同期採用の先生方とできたつながりは今後の教員生活を過ごしていく上で何よりも財産になるものであり、この出会いに感謝したい。お互いに学級経営や部活動指導などで困ったことや悩みがあったときには相談し合い乗り越えていきたい。

昨年度の 10 月に採用試験に合格した感動は今でも鮮明に覚えており、4 月 1 日の辞令交付式で高校の代表として受け取った経験は一生忘れないと思う。研修が始まった際には不安もあったが、なんとか終えることができた。この場をお借りして、初任者研修に関して指導してくださった先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。一年間学んだことを今後の教員生活に生かし、一人一人の生徒と向き合い生徒と一緒に自らもさらに成長していけるようにしていきたい。

保健体育科「保健」　学習指導案

日　時：令和６年１０月２３日（水）
場　所：２２R 教室
対　象：２２R　３８名（男子２２名、女子１６名）
指導者：鈴木　邑
教科書：現代高等保健体育（大修館書店）

１　単元名

（1）健康を支える環境づくり　（ア）環境と健康　㋐環境衛生に関わる活動

２　単元の目標

⑴環境衛生活動は、学校や地域の環境を健康に適したものとするような基準が設定され、それに基づいて行われていることを理解できるようにする。（知識）

⑵人間の生活や産業活動などによって引き起こされる自然環境汚染について、事例を通して整理し、疾病等のリスクを軽減するために、環境汚染の防止や改善の方策に応用すること。（思考力・判断力・表現力等）

⑶生涯を通じて自他の健康の保持増進やそれを支える環境づくりを目指し、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を養うことができるようにする。（学びに向かう力、人間性等）

３　単元と生徒

⑴　単元観

本単元は「環境の汚染と健康」と「環境と健康に関わる対策」、「環境衛生に関わる活動」の３項目で構成されている。上下水道の整備、ごみやし尿などの廃棄物を適切に処理する等の環境衛生活動は、自然環境や学校・地域などの社会生活における環境、及び人々の健康を守るためにおこなわれていることについて学び、日常生活に生かしていくことを目指す。

⑵　生徒観

第二学年普通科・理系、男子２２名、女子１７名、計３９名のクラスである。学習活動を通して、課題等に対する自らの意見や考えをしっかりと持ち、話し合いやグループ活動の際には、互いの意見を尊重し合いながら意欲的に取り組む生徒が多い。

⑶　授業観

日常生活の中で何気なく排出されているごみについて、環境や人々の健康に影響があることだけでなく、将来の地球環境や次世代の人々の暮らしにまで大きな影響を及ぼすということについて理解させたい。

本時では、3R などのごみの減量化につながる考え方を活用し、ごみ減量化の実現のための対策として、個人と社会的な取り組みに分けて考えを深めさせたい。

４　単元計画

	第１時	第２時	第３時（本時）	第４時
主な学習内容	環境の汚染と健康	環境と健康に関わる対策	環境衛生に関わる活動	
	○大気汚染、水質汚濁、土壌汚染のかかわりを理解できる。	○環境汚染の防止とその対策について説明できる。	○廃棄物の処理の現状と課題について説明できる。	○安全で良質な水の確保のための課題と対策について理解できる。

５　単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
上下水道の整備、ごみやし尿などの廃棄物を適切に処理する等の環境衛生活動は、自然環境や学校・地域などの社会生活における環境、および人々の健康を守るために行われていることについて理解している。	人間の生活や産業活動などによって引き起こされる自然環境汚染について、事例を通して整理し、疾病等のリスクを軽減するために、環境汚染の防止や改善の方策に応用することができる。	環境衛生に関わる活動についての学習に主体的に取り組もうとしている。

6　本時の計画

(1)　本時の目標　ごみの減量化実現のためにできる対策として、個人と社会に分けて具体例を考えることができる。（思考力・判断力・表現力等）

(2)　本時の評価規準

知識	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	ごみの減量化の実現のためにできる対策として、個人と社会に分けて考えている。	

(3)　授業展開

	学習活動	指導上の留意点	評価場面・評価方法
導入	1　ごみの量の現状について知る。 2　本時の目標について確認する。	・一人一日当たりのごみの総排出量や家庭ごみの排出割合について説明する。 ・本時の目標と流れについて説明する。	
	本時の目標：ごみの減量化実現のための対策について、個人と社会に分けて考えよう。		
展開	3　ごみの処理の現状と課題について知る。 4　ごみの減量化実現のためにできる個人としての方法を考える。 5　ごみの減量化実現のためにできる社会的な方法についてグループで意見を出し合う。 6　グループでまとめたものを発表する。 7　循環型社会の実現を目指すことの必要性について説明を聞く。	・最終処分場の不足などによる環境への影響について説明する。 ・３Ｒについて具体例を挙げながら説明する。 ・例として記事を紹介する。 ・自由な発想で考えられるような声かけをする。 ・他のグループの発表を聞きながら新たな考えや気づきがあれば、適宜メモするよう指示する。 ・考えた内容に関連付けながら、現在の生活が将来の地球環境に大きく影響することに気付かせる。	・ごみの減量化実現のためにできる対策として、個人と社会に分けて具体例を書き出している。【思考力・判断力・表現力等】 （学習プリント）
整理	8　本時の振り返りをする。	・本時の振り返りを学習シートに記述するよう指示する。	

令和６年度　A-3　初任者研修講座（高等学校）Ⅷ期　「授業実践研修」　検討会協議記録

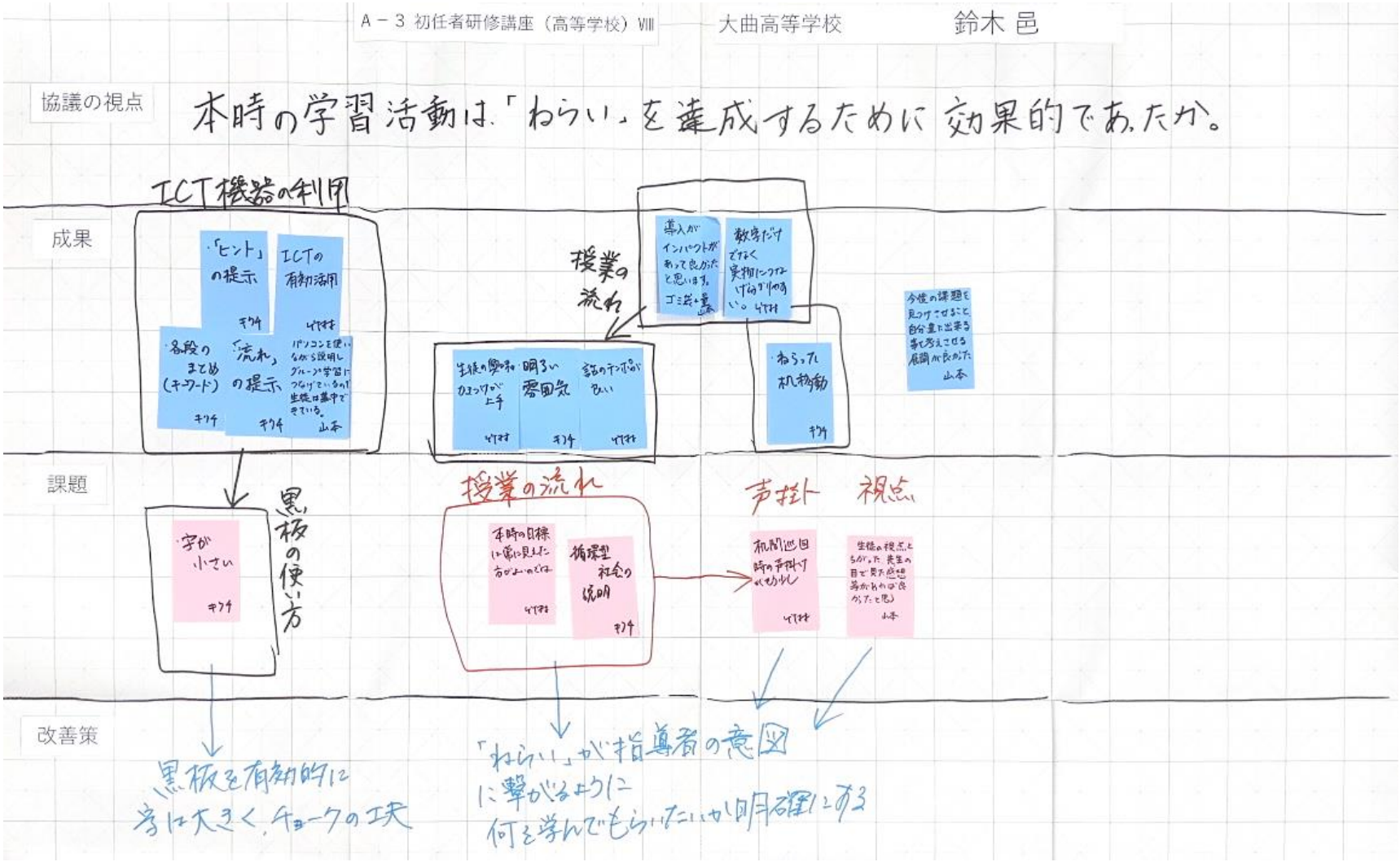
実　施　日	10 月 23 日（水）	学　年・科　目	２年生・保健	単　　元	環境衛生に関わる活動
検　討　会　参　加　者	金森道総合教育センター指導主事、山本力、菊池喜晴、竹村紀子、鈴木邑				

【1】授業者の感想・反省

ごみの減量化の実現のための対策を考えることが本時の目標であったが、授業の前半でごみ処理の現状や課題について紹介することで、個人で考える際やグループでの話し合いにつなげることができたと感じている。一方で、グループでの意見の大半が同じような内容になっていたことから、発問の工夫が必要であったと感じた。

【2】参観者の感想・意見（付箋紙ワークショップ）

【3】改善策



実践的指導力習得研修（採用３年目）を終えて

理科　　佐川　恭太

昨年度に引き続き、上記研修を実施した。校内研修のみであったが、充実した研修となった。研修の内容は、クラス経営、保護者面談、生徒対応、キャリア教育の進め方、教科指導など様々であった。特に自分の成長につながったと感じたのは、キャリア教育の進め方と教科指導についての研修であった。下にその２つについて学んだことを記す。

【キャリア教育について】

進路指導主事の高橋史先生をはじめ、経験豊富な先生方に様々な場面でご指導いただいた。昨年度は進路指導の経験がまったくない状態で１年部の進路担当となり、右も左も分からないような状態からのスタートであったが、多くの先生方に助けていただき、何とか乗り越えることができた。今年度は進路担当２年目を迎えたが、当然ながら２年生の進路指導の経験もないため、昨年同様、学びながら指導する１年となった。

まず、進路（進学、就職、公務員）ごとのスケジュールの見通しを持てたことが自分としては良かった。進路担当として、学年ＰＴＡや学年集会等で、今後の見通しや今やるべきことについて説明しなければならなかったが、分からないことだらけだったため、進路資料を見たり、先生方から教えていただいたりしながら、自分なりに進路について整理した。おかげで進路ごとのスケジュールが頭に入り、今何をすべきか、いつまでに何をしなければならないのか、ある程度見通しを持つことができた。

生徒への進路の意識付けについても、いろいろと考えさせられた。進路希望調査や生徒面談をしてみると、進路希望がはっきりしている生徒やぼんやりしている生徒など、進路に対する意識は様々である。３年生になる前に、進路の選択肢をできるだけ多く持たせておきたいと考えながら指導にあたったが、なかなか思い通りに生徒は動いてくれない。この意識付けに関しても様々な方法があることを教えていただいた。実施できなかったものも多いので、今回学んだことを今後の指導に生かしていきたい。また、進路指導のすべてを一人で担当し、１人でなんとかするのではなく、外部の講師や他の先生方と協力しながら、最も効果的な形で行うことが必要であると感じた。

【教科指導について】

採用前の講師時代から、生徒が主体的・対話的に活動し、深い学びができるよう授業作りをしてきた。毎年、マイナーチェンジを繰り返し、よりよい授業になるように工夫してきた。今年度は、「ノートの取り方」を見直し、２学期期末考査後から新しい手法を取り入れた授業を行った。１月２１日に研究授業を実施し、参観していただいた先生方から様々なご意見をいただいた（導入するに至った経緯やねらいについては、学習指導案２ページ目に記載してあるので、そちらをご覧いただきたい）。いただいた意見や自分なりの反省から見えてきた課題は、ノート作成のねらいを十分に理解できていない生徒がいるということと、ノートをうまくまとめられておらず、本来享受できるはずの効果を十分に得られていないということである。一朝一夕にできるようなものではないし、量から質が生まれると思うので、ノート作成のねらいやまとめ方について授業のたびに説明したり、うまくまとめられている生徒のノートを全体に共有したりして、根気強く指導していき、ノート活用の効率を上げていきたい。

【最後に】

研修を終えるにあたり、校長先生からご講話をいただいた。その中で、日々の業務すべてが研修であるという意識（OJT（On the job training））を持つことが教員としての成長につながるということを教えていただいた。実際に、計画していた研修はもちろん、それ以外の業務の中からも多くのことを学ぶことができた。来年度はおそらく３年生の担任として進路指導を行うことになると思うので、それ以外の業務も含めて、OJT の意識を持って学び続けていきたい。

今年度も昨年度同様、多くの先生方にお世話になった。この場をお借りして感謝申し上げます。

21R、22R　生物　学習指導案

日　時：令和７年１月２１日（火）
場　所：２校時２２Ｒ教室
　　３校時２１Ｒ教室
対　象：２２Ｒ　男子６名女子１２名
　　２１Ｒ　男子６名女子１２名
指導者：佐川　恭太
教科書：『生物』（数研出版）

１　単元名　発生と遺伝子発現

２　単元の目標
（１）発生と遺伝子発現についての基本的な概念や原理・法則などを理解しているとともに，科学的に探究するために必要な観察，実験などに関する基本操作や記録などの基本的な技能を身に付ける。【知識・技能】
（２）発生と遺伝子発現について，観察，実験などを通して探究し，遺伝子発現が発生にどのような影響を及ぼすのかを見いだして表現する。【思考・判断・表現】
（３）発生と遺伝子発現に主体的に関わり，見通しをもったり振り返ったりするなど，科学的に探究しようとする。【主体的に学習に取り組む態度】

３　指導計画（全体８時間　本時８／８ ）
（１）発生と遺伝子発現（１時間）　（２）動物の配偶子形成と受精（２時間）
（３）カエルの発生（２時間）　（４）カエルの発生と遺伝子発現（２時間）
（５）ショウジョウバエの発生と遺伝子発現（１時間）

４　本時の学習
（１）本時のねらい　自作問題を解いたり、クラスメートのノートを見たりすることで、自分のノートのまとめ方についての考えを深めさせる。

協議の視点「学校教育目標を達成するための共通実践事項を踏まえた授業が展開されていたか」
本年度の重点目標　２　学力向上　（２）主体的・対話的で**深い学び**の実践

学習場面	学習活動	○指導上の留意点　◇評価規準
導入 10 分	オリガミノートの方法とメリットについて確認する。	
	本時の目標：自作問題を解いたり、クラスメートのノートを見たりすることで、自分のノートのまとめ方についての考えを深めることができる。	
展開 35 分	・自作問題を解く。 ・クラスメートのノートを見る。 ・ノートをまとめる。	○生徒の活動を注意深く見取り，必要な声かけをする。
まとめ 10 分	・単元の学習進捗状況、ノートまとめに関して気づいたこと、定期考査までにやるべきことについてまとめる。	◇ノート作成に関して考えが深まっている。【Google フォーム】

受験科目としての生物の課題とその対策

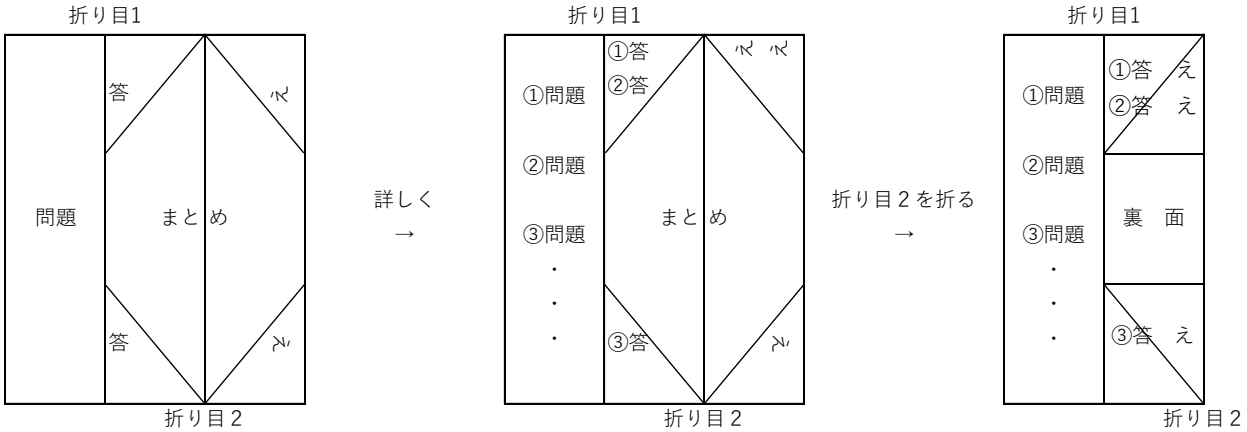
今年度、新傾向問題となる３年生の生物模試問題を振り返ると、思考考察問題の比重が増えた。また、問題の解き方に「型」がなく、その都度、臨機応変に考えなければならない。真の思考力を問われていると感じている。型があれば対策が立てられるが、型がない問題にどう向き合い、取り組ませるか、日々考えながら授業を進めているのが現状である。

しかしながら、どの問題にも、「思考力」の要素だけでなく、「知識・理解」の要素も含まれており、問題ごとにその比率が異なっている。そして、いくら思考力の比重が大きいとはいえ、それ以前に、出題分野の基本的な「知識・理解」が不十分であれば、問題を解く手がかりがなく、思考する入口にすら立つことができない。つまり、思考するためにまず身に付けるべきは「知識」や「正しい理解」であると考えた。

生物は元来、知識量が非常に多く求められる科目であるが、学習指導要領が改訂されるたびにさらに増えている。これらの知識を限られた時間の中で効率的に定着させるための手段を模索する中で、現在「オリガミノート」というノート記入法が効果的だと感じており、授業に取り入れている。

オリガミノートの作成方法（下図参照）

1. ノートを縦三等分に折る。
2. 右側３分の２のスペース（下図：まとめ）に学習内容のまとめを記入する。記入の際は、ただ転記するのではなく、自分で重要だと思った部分を抜き出したり、「つまり…」と自分なりに内容を整理したりしてからまとめる。
3. まとめた内容から、重要だと感じた内容について問題を作成する。問題は番号を付けて左側３分の１のスペース（下図：問題）に記入する。
4. 折り目の２を折り、ノートの上下右端を折り返す。そのスペース（下図：答え）に各問題の解答を記入する。



オリガミノートの特性

①「検索練習」の効果

学習内容をクイズ化して、何度もクイズに答える（検索練習）という方法をとるだけで、ただ講義を聞いて学習した場合よりも 10～25%程度成績を上げる効果があったという実験結果が出ている。また、この効果は年齢や学問のジャンルの違いにほぼ影響されないことも分かっている。クイズに何度も答えて知識を引き出すことに慣れることで、実際の試験で感じるプレッシャーへのストレス耐性も上がるという結果も出ている。

②「再言語化」の効果

授業や自学でノートを作成する際、教科書や資料、板書をそのまま書き写すだけだと、資料（板書）作成者と学習者（生徒）に語彙力の差があると、内容を正確に把握できず理解が深まらない場合が多々ある。オリガミノートを作成する際は、学習内容をできるだけ自分の言葉を使って「再言語化」することを推奨している。そうすることで、学習内容がより一層わかりやすくなる。

本時の授業では、オリガミノートの作成方法とその効果を再度確認し、知識をより効率的に定着させるノート作りを目指す。

実践的指導力向上研修を終えて

国語科　三浦　俊喜

【はじめに】
　採用８年目を迎え、実践的指導力向上研修を受講した。採用当初と比べ積み重ねた経験がある一方で、学校教育を取り巻く環境や社会的な要請、必要とされる資質や能力は少しずつ変化しており、本研修はその潮流の変化を学び、対応の仕方を考える良い機会となった。

［Ⅰ期　6/21（金）　秋田県総合教育センター］
○いじめや不登校の未然防止と対応（講義・演習）
○「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて～「連携・協働」の３つの提案～（説明）
○教育活動全体を通じたキャリア教育（講義・演習）
○学校組織の一員として　－自己理解に基づく目標設定－（講義・演習）

［Ⅱ期　7/24（水）　秋田県総合教育センター］
○カリキュラム・マネジメント（講義・演習）
○カリキュラム・マネジメントを軸にした授業改善（講義・協議・演習・まとめ）
　Ⅱ期の研修では、「カリキュラム・マネジメント」を中心とした内容の講義や演習を行った。研究授業もその視点からの授業改善を目指して実施したものである。７月に授業を実施し、その様子を撮影した映像を見ながら協議するという内容であった。
　授業を設計するにあたって、まず本校の教育目標と国語科の重点目標を確認した。本校の教育目標には「２　真理を愛し、ものごとを科学的に考察し実践できる人間を育成する。」という項目がある。今回授業で扱った古文は科学というよりは人文学に位置づけられる分野ではある。しかし本文の語りに共感するだけでなく、当時の時代背景や語り手を取り巻く人間関係に目を向け、本文をメタな視点から分析しなおすことは「科学的に考察」する能力と通じるものがある。また、国語科の重点目標に「大学入学共通テストに対応するとともに、新教育課程に対応した授業および学習のあり方について研究・実践を進める。」という項目がある。大学入学共通テストの問題作成方針には「言語を手掛かりとしながら，文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり，目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求める」という文言があり、従来の古典Ｂよりも文章の深い理解と思考が求められている。さらに３年生の授業であったため、文法や語彙などの知識事項に重きを置くのではなく、それらの知識を活用し、自分なりに作品について考察を深め、意見をもてるようになることが求められると考えた。
　以上の要請に応えるため、今回の授業では『蜻蛉日記』を題材とし、「作者と兼家の心情を多角的に分析し、説明することができる」という目標を立てて授業を行った。授業はワークシート→話し合い→ワークシートという流れを通して、個々の生徒が他者との対話によって思考を深めることを意図した構成にした。映像視聴後の協議では、「生徒同士の話し合いが生徒の考え方の変容や新たな気づきにつながっていた」「カリキュラム・マネジメントの視点にもとづいた探究的な学習ができていた」との評価が得られた。

【全体を通して】
　採用８年目となり、臨時講師や初任のころよりも自分の考えや意見を表明する機会が増えたと感じている。そのような場面で、ともすれば自身の経験から「こうするべきだろう」「以前はこうしていた」という漠然とした根拠にもとづいて判断をしてしまいがちである。しかし社会的に学校に期待されるものや常識、学校教育を取り巻く事情は刻刻と変化しており、それらにも目を向け、学び続ける必要があると、本研修を通して改めて認識した。特にカリキュラム・マネジメントを考えると、学校全体で目標とする事柄を認識し、その実現に向けた教育活動を行うことの必要性を強く感じた。本研修での学びを日々の指導に生かし、生徒の能力と主体性の向上に努めていきたい。

国語科（古典探究）学習指導案

日　時：令和６年７月１１日（木）２校時
場　所：３３Ｒ教室
対　象：３３・３４Ｒ　３８名
授業者：三浦　俊喜
教科書：『探求古典探究　古文編』（桐原書店）

１　単元名　古典作品の内容や解釈を自分の知見と結び付け，考えを深める。

２　単元の目標
（１）古典の作品や文章に表れている，言葉の響きやリズム，修辞などの表現の特色について理解できる。〔知識及び技能（１）ア〕
（２）古典の作品や文章について，内容や解釈を自分の知見と結び付け，考えを広げたり深めたりすることができる。〔思考力・判断力・表現力等（１）オ〕
（３）古典の作品や文章について，内容や解釈を自分の知見と結び付け，考えを広げたり深めたりしようとしている。〔学びに向かう力、人間性等〕

３　教材　『蜻蛉日記』「嘆きつつひとり寝る夜」

４　生徒と単元
（１）生徒観
普通科文型２クラスのうち、４年制大学進学希望者を中心とした生徒３８名により構成されたクラスである。文法的知識の習熟度には個人差があるが、基本的な事項が身に付いている生徒も多い。また、当時の婚姻制度などの古典常識について一定の知識を有している。一方、助動詞の識別や語彙、和歌の理解には課題が見られる。物語や日記など、ストーリー性のある文学作品について関心を持って取り組むため、教材の内容へのより深い理解を促し、古典学習への意欲をさらに高めたい。
（２）教材観
『蜻蛉日記』は藤原道綱母によって著された日記文学である。本単元で扱う部分は、作者が夫兼家の浮気に対し和歌の贈答によって自らの心情を伝達しようとする内容である。和歌の内容や修辞技巧のみならず、手紙の送り方など細かな行為自体にも意図があり、それらの読解を通して登場人物の心情やすれちがいが理解できる作品となっている。
（３）指導観
生徒たちは、文法事項や語句の意味を調べながらであれば、ある程度正確に現代語訳を作成することができる。一方和歌の読解は苦手としており、修辞技巧の分析を生かして内容の深い理解を促したい。また現代語訳を通した全体の内容読解に加え、当時の社会常識等も含めた多角的な視点から登場人物の心情を読み解かせたい

５　単元の指導計画（総時数４時間）
・文学史的知識、現代語訳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２時間
・作品の展開のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１時間
・登場人物の心情の理解・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１時間（本時）

６　題材の評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
知 文章や和歌に表れている，言葉の響きやリズム，修辞などの表現の特色について理解している。	思 作品について，内容や解釈を自分の知見と結び付け，考えを広げたり深めたりすることができている。	態 作品について，内容や解釈を自分の知見と結び付け，考えを広げたり深めたりしようとしている。

7　本時の計画（本時　4/4時間目）

（1）本時の目標

作者と兼家の心情を多角的に分析し、説明することができる。

（2）本時の展開

時間	学習活動	教師による支援	評価規準 （評価の方法）
導入 5分	1　兼家が浮気に対して慰謝料を支払うことになった場合、いくらになるか考える。 2　目標を確認する。	・タブレットを用いてGoogle Formで意見を収集、集計する。 ・目標を板書する。	
	目標：作者と兼家の心情を多角的に分析し、説明することができる。		
展開 40分	3　ワークシートに、兼家の言動に関する作者と兼家相互の心情や、当時の社会常識を書き出す。（10分） 4　他の生徒と意見を共有し、自分の気づかなかった意見をワークシートにメモする。 5　ワークシートに記入した内容を全体で共有する。 6　改めて兼家の支払うべき慰謝料を決定する。	・なるべく多くの視点から考えるよう促す。 ・本文だけでなくリード文や既習事項も参考にするよう促す。 ・指名により発表させ、板書する。 ・Google Formで集計し発表する。	【評価規準】 ・古典常識や登場人物の境遇も踏まえて、作者と兼家の心情を正確に読み取っている。 【評価の方法】 ・観察 ・ワークシート ・Google Form
まとめ 5分	7　振り返りを行う。	・Google Formで振り返りを提出する。	

協議の視点…授業内の活動や振り返りが、主体的・対話的で深い学びの実現につながっているか。

実践的指導力向上研修　について

三浦　史聖

0. はじめに

教員になり、８年目である。まだ、経験が少ないからかもしれないが、まったく同じような生徒や状況がないことを感じている。他の先生方からの教育現場における話を聞くことで実際に直面している課題に対する有効なアプローチを知る貴重な機会となった。特に、いじめや不登校への未然防止策、学校のカリキュラムマネジメント、授業改善の方法についての学びは、今後の自分の教育実践にとって大きな影響を与えると感じている。

1. いじめ・不登校への未然防止策と対応

研修の中で、いじめや不登校への未然防止策とその対応方法について詳しく実例を交えて学んだ。いじめは、学校における最も深刻な問題の一つであり、その影響は生徒の心身の健康だけでなく、学業成績や社会性にも大きな影響を与える。

また、不登校については、ただ単に学校に来ないということがそもそも問題行動ではなく、その背景にある心理的要因等、多様な要因・背景により、結果として、不登校になってしまっていることが多い。不登校については、その原因・背景を踏まえ、生徒一人ひとりに丁寧に対応しなければならない。生徒が抱える個々の問題に対応するためには、学校全体での支援体制が必要である。そのためには、教員が生徒、そして、その保護者との信頼関係を築き、悩みを気軽に話せる環境を提供することが重要である。研修では、教員と生徒、保護者、さらにはカウンセラーや地域の支援団体と連携することが効果的であることが強調されていた。不登校生徒への支援は、保護者と一緒に行うものであり、小さな目標を設定して、少しずつその目標を達成していくことが重要である。

これらの問題に対しては一人の教員のみが対応することでは解決をすることは少ない。学校全体での取り組みもさることながら、外部機関とも連携し、チームとして対応していくことが欠かせないことを再認識した。また、教員が日々の授業で生徒同士のコミュニケーションを促進したり、時には、生徒に寄り添う声掛けをしたりすることにより、これらの問題への未然防止を行っていきたい。

2. 教育活動全体を通じたキャリア教育

研修を通じて印象に残ったのは、教員８年目ともなるとキャリア教育そのものについてもさることながら、所属する高校のキャリア教育についての深い理解や改革が必要となってくることを強く感じた。キャリア教育が単なる職業指導にとどまらず、生徒一人ひとりの自己理解を深め、将来の選択肢を広げる重要なプロセスであり、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ねの基盤となるものである。キャリア教育は自己探究から始まり、生徒が実社会と自分との繋がりを現実感を感じつつ自分の強みや興味を知り、それに基づいて未来を描く手助けをすることが、教員としての役割である。また、キャリア教育の中で多様な価値観や生き方を尊重する姿勢を持たせることや現在高校生活の中にある近い目標を実現することが、遠い目標である将来に生かされていることを気づかせることが、生徒が今後のスマート社会を生きていく糧になると考える。

3. カリキュラムマネジメントに基づいた授業改善

カリキュラムマネジメントを効果的に実践するためには、授業改善が不可欠である。授業の質を向上させるためには、教員自身の意識改革とともに、日々授業を振り返り、フィードバックを行い、改善策を考え、実践していくことを繰り返さなければならない。その中で特に、学校教育目標と授業の間の繋がりを意識し、学校とした一貫した教育活動を行わなければならないことを強く感じた。

本校の教育目標を達成するためには、生徒が受け身であるだけの授業は適していない。学習者の主体的な参加を促進するための方法を取り入れ、教室での授業時間を生徒同士のディスカッションや実践的な活動に充て、予習や不足した分は個々の生徒が自分のペースで学びを進める方法が理想である。これは授業中は生徒間での意見交換やグループワークが中心になるため、より深い理解が促されることになり、ここで学習指導と学習評価の一体化も実現できるのではないかと感じる。

また、最近は、ICT を活用した授業実践も課題とはなるが、デジタルツールを使うことが目的とならないような活用方法を探る必要がある。同僚との授業交流やフィードバックの時間を設けることにより、新たな教育ツールであるデジタルツールの活用方法を自分一人の視点ではなく、他の教員からの視点を

得ることによって、よりよい活用方法を模索していきたい。

4. 終わりに（研究授業を通して）

本研修において行った研究授業はカリキュラムマネジメントの視点からの授業を意識して行ったものである。授業の学習指導案を考えるにあたって、本校の教育目標を考慮し、既習の問題の解法を用い、未習の問題に適用して解く過程において、他者との意見交換をすることにより問題解決をするような授業構成にした。このことにより、生徒が自らの意見を述べたり、他者の意見を聞くことにより、思考を深めることができる内容であった。これは、実社会においての問題解決方法そのものであり、それを授業内で実践することができたと考えている。今後も、他者との繋がりを意識した授業や、数学の魅力をより伝えられるような授業を展開していきたい。

日々の授業や学校の一員として、今回の研修で学んだ内容を活かし、より良い教育環境の構築を目指していきたい。

数学科学習指導案

日　時：令和６年７月１７日（水）４校時
場　所：１５Ｒ教室
対　象：１５Ｒ　３０名（男子１３名、女子１７名）
授業者：三浦　史聖
教科書：『NEXT 数学Ⅰ』（数研出版）

1.単元名　：　数学Ⅰ（数と式）

2.単元の目標　：数と式について数学的活動を通して、方程式・不等式の解の意味や絶対値や不等式の性質について理解し、一次不等式や絶対値を含む方程式を解くことができる。

3.生徒と単元

(1) 単元観　：本単元は「式の計算」「実数」「一次方程式」の３項目で構成されている。中学校で学んできた内容も多く含まれるが、数を実数に拡張する意義を理解し、数学の基本となる式変形・計算を扱う単元である。また、実生活の問題を考えるときに数と式の考えを用いて考察し、それらをその問題解決に活用する力を身に付けることを目指す単元である。

(2) 生徒観　：進学校・普通科クラス。数学に対して苦手意識を持つ生徒が多く、おとなしい生徒が多い。 自分の考えを積極的に数学的に表現することができるようにすることが課題である。 グループ学習を通して、自分の考えを活発に述べることが出来るようにしたい。

(3) 指導観　：本単元は、高校数学の基礎となる単元である。この後の高校数学を学んで行く上でも生徒全員が内容を理解し、知識・技能を身に付けていて欲しい内容である。基本となる計算技術や考え方を身に付けた上で、問題に対する多用なアプローチをして理解を深めていきたい。

4.単元の指導計画（20 時間）　：　第１節　・・・・・・　（6 時間）
第２節　・・・・・・　（6 時間）
第３節　・・・・・・　（8 時間）
（前時）　・・・・・・ (5 / 8)
（本時）　・・・・・・ (6 / 8)

5.単元の評価規準　：

①:知識・技能（技術）	②:思考力・判断力・表現力	③:主体的に学習に取り組む態度
数を実数まで拡張する意義を理解するとともに，簡単な無理数の四則計算をすることができる。集合と命題に関する基本的な概念を理解している。絶対値の意味や絶対値を含む等式の性質について理解し，絶対値を含む解を求めることができる。	問題を解決する際に，既に学習した計算の方法と関連付けて，式を多面的に捉えたり目的に応じて適切に変形したりすることができる。	事象を数と式の考えを用いて考察するよさを認識し，問題解決にそれらを活用しようとしたり，粘り強く考え数学的論拠に基づき判断しようとしたりしている。・問題解決の過程を振り返って考察を深めたり，評価・改善したりしようとしている。絶対値を含む等式の意味を考えようとしている。

6.本時の目標　：絶対値の等式の意味を理解して、問題の解法についての自分の考えを他者に伝え、互いに意見を交換し合うことで、絶対値を含む等式を解くことができる。

7 .本時の指導計画

	学習内容	指導上の留意点	評価規準
導入（10）	[本時の目標] 絶対値を含む等式を解くことができる。 [問題 1] 次の方程式を解け。 一人で 考え解いた後に、グループで答えを確認後、発表をする。	前時での復習を兼ねている。わからなければ、なぜその答えになるかをグループで確認するよう促す。	
展開（35）	グループで活動 [問題 2] 次の方程式を解け。 $\lvert 2x-1\rvert=3x-4$ 一人で考えた後に、グループで考える。 グループで確認、話し合い後、発表 [問題 3] ＊確認問題 次の方程式を解け。 $\lvert x-1\rvert=2x-1$ グループを解体し、一人で問題を解く。	[問題1]の解き方を利用して解けないかというように生徒に伝える。	③ 互いに意見を交換し、問題を解こうとしている。 ① 集めたプリントを採点することにより、本時の目標が達成されたか否かを確認する。
まとめ（10）	生徒に問題を解く上でのPOINTをまとめ、そのまとめを発表させる。	プリントを提出させる。	

8 .協議の視点 ： 問題解決のプロセスについて

中堅教諭等資質向上研修を終えて

佐々木　悠華

採用から早くも１１年目を迎え、この中堅教諭資質向上研修をもって経験者研修を終える。研修に携わっていただいた方々への感謝の気持ちを忘れず、中堅教諭としての責務を果たせるように、研修で学んだことを生かしていきたいと思う。

【選択研修：大仙市立仙北図書館】

大仙市立仙北図書館は、大仙市内の８つの図書館の中で２番目に利用者が多い図書館である。ふれあい文化センターなどの文化施設や、サッカー場などのスポーツ施設も併設されており近隣住民が利用しやすい立地であることも関係していると思われる。また、月に１回の読み聞かせの学校支援や、保育施設や介護施設への貸し出しも行っている。

仙北図書館の課題として、ＹＡ（ヤングアダルト）である１３～１８歳の利用者が少ないことが挙げられる。そのため、館内ではＹＡが本を手に取りやすい配架の工夫をされていた。ＹＡの図書館利用の主な目的は自習スペースの利用であるため、入り口から自習スペースに至るまでにＹＡ特集を展示していた。この課題は、高校の図書室利用者の減少にも通ずることであり、まずは利用者の目にとまる工夫が大事であると再認識した。

貸出返却、書架整理などの基本的な業務に加え、月に１回更新している児童書の展示コーナーの作成を任せていただいた。テーマの候補を「おばけ」「むし」としたが、「おばけ」はおばけコーナーができるほど人気な絵本であるため、テーマを「むし」として作成を進めた。私が好きな「かぶと三十郎」を紹介したかった。展示作成は、際限なく時間をかけてしまうため、目標時間を決めて時間内に収まるような取り組みが必要であると感じた。職員の方から多くのアドバイスをいただき完成に至った。読み聞かせの見学では、利用者の年齢に合わせた選書や声かけを臨機応変に行っており、対応力の高さを感じた。初めは集中できなかった幼児児童も、徐々に本の世界に入り込んでいく様子が見られた。複数人で幼児児童を観察することができるメリットが生きていると感じた。今日学んだ対応力や生徒観察を、授業に生かしたいと思う。

特に難しいと感じた業務はレファレンスだ。利用者の要望から検索をかけて、図書を探し出す練習をさせていただいた。「戦前の中国の地図を見たい」という要望では、「戦前」「中国」「地図」で検索しても要望の図書は見つからないため、地理関係の本棚を見て探し出した。結果、「世界史」分野の図書より「昔の中国の地図」を確認することができた。しかし、実際の利用者はこの図書の地図で満足いくかはわからない。少ない情報の中で、利用者が求めていることを予想し、多角的に考えながら選書を進めていくことになる。時間との勝負でもあり、非常に難しい業務であった。

大学で司書教諭の資格を取得したが、10 年近く図書関係で仕事をすることはなかった。しかし、数年前に司書教諭としての分掌についた際、知識技術不足で右往左往した経験から、今回の選択研修に図書館を選択させていただいた。この経験を、資格が必要となった次の機会に生かしたいと思う。

利用者の多い土曜にも関わらず、研修を引き受け、様々な業務を体験させていただき、館長はじめとした仙北図書館の方々には深く感謝しております。

児童展示コーナー　テーマ「むしのほん」

【特定課題研究】自己の学習を客観的に捉える活動の工夫について

１　研究の概要

文部科学省の「学びの主体性に関する指針」では、「学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」ことが主体的な学びであると示している。

この「見通しをもつ力」の育成のためには、生徒自身が現在の学習状況や成果を客観的に捉えること

が必要であると考え、継続的な小テストの実施とポートフォリオの作成による二つの手立てを用いて授業改善に取り組んだ。

２　成果と課題

(1)現在の学習状況について（１回目）

１年生を対象に、昨年の７月に生物基礎の授業においてアンケート（１０項目）を実施した。結果は表１である。

(2)授業改善

①小テストの実施

生徒に現在の学習状況を客観的に捉えさせるため、小単元終了ごとに Google フォームを使用して計１２回実施した。また、各小テストの正答率の低い問題を集め、大単元が終わった際に再テストを計３回実施した。生徒自身の現在の学習状況を点数化して確認させるとともに、１回目と再テストの結果を比較して、自己の変容を確認させることを目的とした。

②ポートフォリオの作成

単元における学習成果を客観的に捉えさせるためのワークシートを作成した（下図）。上段には単元の学習の前後で、同じ問いかけに対して記述する欄を設け、下段には学習を振り返って気付いた成果や自己の変容について記述する欄を設けている。この２つの記述の変化を認識することで、自己の学習の成果について気付かせることを目的とした。

また、ワークシートに単元すべての「本時の問い」を記入しておくことで、生徒に単元の学習内容と大単元内の流れの把握を促すことをねらいとした。

(3)現在の学習状況について（２回目）

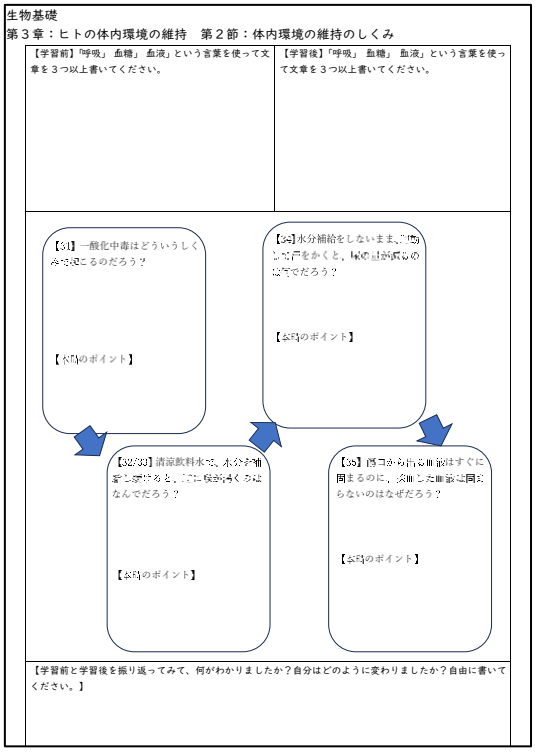
１年生を対象に、昨年の 12 月に生物基礎の授業においてアンケート（15 項目）を実施した。項目には、文理選択と小テスト、ポートフォリオについて追加した。　　表１

アンケート項目	第１回	第２回	(注１)
１時間の授業内容で、学ぶべきことが分かる	98.2%	98.6%	100%
学習内容が理解できない時､理解できない理由を把握している	74.5%	69.5%	90.2%
生物基礎の勉強の仕方が分かる	68.3%	57.5%	92.0%
小テストの勉強に意欲的に取り組んでいる	－	86.3%	90.0%
小テストの勉強をする中で、学力の向上を感じる	－	86.3%	90.0%
ポートフォリオを作成することで、単元の流れを理解できる	－	68.5%	92.0%
生物の家庭学習時間は１学期に比べて増えている	－	53.4%	62.0%

(注１)来年度、２年生で生物を選択する生徒に限定した結果

(2)①小テストの実施により、生徒は「単元終了後の小テストでよりよい結果を出す」という見通しをもって学習することができている。これは、アンケートの家庭学習時間の増加にも現れている。自由記述には、「小テストがあるので、考査以外の時間も生物基礎の勉強をするようになった。」との記述があった。(2)②ワークシートの下段の学習を振り返って気付いた成果や自己の変容について記述する欄には、「ワークシート（ポートフォリオ）の質問を自分で調べてから授業に臨んだ。」「日常のことと授業の内容を関連付けて考えることができた。」「計画的に勉強しようと思った。」などの記述があった。継続的に小テストを実施することや、単元で学ぶ内容の見通しをもつことのできるワークシートを活用することで生物基礎への関心が高まり、学習時間の増加につながっている。

生徒自身が、自分の足りない知識を小テストで確認し、ワークシートを通して１時間完結の細切れの学習だけではなく、大単元の大きな流れを把握する機会を教師側が作ることで、生徒の見通しをもつ力の育成に関与できるのではないかと思われる。私自身、初めてポートフォリオの作成を行ったが、今後は改良を加えてよりよい授業を作っていきたいと思う。



英語科「英語コミュニケーションⅠ」学習指導案

実施日時：令和６年６月２０日（木）２校時
場　　所：１４Ｒ教室
対　　象：１４Ｒ３１名（男子１４名、女子１７名）
指 導 者：伊藤　孝紘　　Matthew Wojtysiak
教 科 書：ELEMENT English
　　Communication Ⅰ（啓林館）

１　単元名　Lesson 3　Bye Bye Plastics

２　単元の目標
・「私たちの惑星への貢献」をテーマに、メラティとイザベルの取り組みに関する英文を読んでその内容を理解するとともに、自分たちが環境保全のためにできることを考え、伝えることができる。
・関係代名詞、使役動詞の用法を理解し、活用することができる。

３　単元とＣＡＮ－ＤＯ形式での学習到達目標との関連
・日常的な話題について、必要な情報をおおまかに聞きとったり、話し手の意図を把握したりすることができる。【１年　聞くこと】
・日常的な話題について質問したり、簡単な理由や根拠を添えて質問に答えたり説明したりすることができる。【１年　話すこと（やりとり）】

４　単元の評価規準

①知識・技能	②思考・判断・表現	③主体的に学習に取り組む態度
情報や考えを述べるために必要となる語彙や表現等を理解している。	本文の内容を理解し、概要や自分の考えを英語で表現している。	・グループ活動に積極的な態度で参加している。 ・自分の考えをわかりやすく伝えようとしている。

５　単元観
本単元では、バリ島の少女、メラティとイザベルが“Bye Bye Plastic Bags”という運動を立ち上げ、プラスチック汚染を止めるために活動していく様子が描かれている。十代の少女たちが身近な環境問題に気付き、様々な困難に直面しつつも自ら行動を起こし問題を解決してゆく様子は高校生にも共感できる内容である。本単元の学習を通じて、自分たちが環境保全のためにできることを考えさせ、生徒同士で考えを深める機会を作りたい。

６　生徒観
ペアワークやグループワークに積極的に取り組み、疑問点なども自発的に質問することができる。その積極性を生かして、receptive knowledge にとどまらず、習った文法事項などを実際の場面で使用しながら productive knowledge へと昇華させていきたい。

７　単元計画（総時間１０時間）

主な言語活動等（◎本時の内容）	評価
◎プラスチックごみが引き起こす環境問題について理解し、自分の意見を述べる。	活動の観察
・メラティとイザベルの取り組みに関する英文を読み、概要を捉える。	ワークシート
・本文のあらすじを相手にわかるように伝える。 ・自分たちが環境保全のためにできることについて考えを書く。	英作文

８　本時の学習（本時２時間目）

（１）目　標

・プラスチックごみが引き起こす環境問題と各国の対策についての英文を聞き、情報をまとめることができる。

・聞き取った情報をもとに、問題に対する自分の意見を must, have to, should などの助動詞（論理・表現Ⅰ既習事項）を用いて表現することができる。

（２）指導計画

過程	学習活動	教師の支援及び留意点	評価
導入 ５分	・warm up		
展開 ３５分	本時の学習課題を確認する。 プラスチックごみ問題について、クラスメートと意見交換しよう。 ・対話の数行を読み、内容を推測する。 ・Key phrase に注意しながら対話を聞く。 ・Comprehension Qs に答える。 ・学習課題について brainstorm する。 ・必要な対話表現を学ぶ。 ・ペアを換えながら意見交換をする。	・机間指導しながら支援する。 ・メモをとりながら聞くように指示する。 ・適切なフィードバックで内容を深めさせる。 ・must, have to, should を用いた表現と、相手の発言への反応の表現を導入する。 ・発表を聞く生徒は必要に応じてメモを取る。	・習った表現を用い、ペアでやりとりができている。（活動の観察）（②③）
まとめ １０分	・数名の意見をクラス全体で共有する。	・Follow up Qs をして対話を続ける。	

Plastic bags

Part 1: Please read the first sentences of the dialogue. What do you think Matthew and Takahiro are going to talk about?

Matthew: "I read something interesting yesterday."

Takahiro: "Yeah? What did you read?"

Matthew: "I read an article about plastic bags..."

Part 2-1: Please listen to the dialogue and answer the questions.

Are these statements *True* (T) or *False* (F)?

1. Matthew heard about plastic bags from the television. _____
2. Plastic pollution can cause water pollution. _____
3. Japan, China and the US have completely banned plastic bags. _____
4. Campaigns tell people to use plastic bags. _____
5. Matthew thinks that banning plastic bags is the best way to stop people from using plastic bags. _____
6. Takahiro disagrees with Matthew's opinion. _____

Part 2-2: Please listen to the dialogue again. Answer any questions that you missed.

Key Words: **ban** **charge** **pollution** **re-usable**

Part 3: Please read the questions and then listen to the dialogue one more time. Then, please answer the questions.

1. What countries does Matthew tell Takahiro about as an example?

_____

2. What countries does Takahiro tell Matthew about as an example?

_____

3. Please put the countries in the right category. Which way does each country use to stop plastic pollution?

Ban	
Charge	
Campaign	

GOAL

Share your ideas about plastic pollution with your classmates!

Your ideas

What do you think about plastic pollution?

→ I think _____

Why ?

→ Because _____

What do you think we should do to stop plastic pollution?

→ I think _____

_____

useful expressions

should / must / have to

ban / stop *doing* / charge / recycle / start a campaign / encourage people to *do*

Notes

name	his / her idea

研究授業　教科別協議会の記録

実施日	６日２０日（木）	科目・単元	外国語・英語コミュニケーションⅠ
主題（題材）	Bye Bye Plastics		
授業参観者	柴田孝博、武田誠健、亀沢貴子、村井稔子、小林美穂、髙橋賢右、渡邉雄大		
授業研究会参加者	高橋輝享（指導主事）、伊藤孝紘（授業者）、 マシュー・ウオティジアック（授業者）、小林美穂（司会）、柴田孝博（記録）、 武田誠健、亀沢貴子、村井稔子		

１　授業者の感想等

（伊藤）最後の activity の時間が少なくなり、急いでしまったのが反省点。リスニングスキルを高めるよういくつかステップを作りダイアログを何度も聞かせた。マシュー先生と procedure を作ってそれを共有するために何度も打ち合わせを行った。理想的な TT であったと思う。

（マシュー）生徒たちに環境問題というトピックについてそれぞれの考えをどうやって他の人と共有させたらいいかということを身につけてほしかった。伊藤先生とのダイアログは自然な形に、そして生徒にわかりやすいように心がけた。

２　参観者の感想・意見

（武田）全体的な展開がよく organize されていた。ダイアログを３回もと思ったが、各回で聞くポイントを与えるなどの工夫がされていて、生徒は集中して聞けたようだった。（亀沢）生徒の反応も良かった。担任である伊藤先生との関係が良好なためだと思う。ダイアログのレベルは低いわけではないが、聞き取る目標がはっきりしていたので生徒もついていけたようだった。導入も楽しかった。生徒にストレスを与えないいいクイズだった。リスニングの活動においては、スペリングのミスは気にさせないといったハードルを１つ下げることの大切さを感じた。可能であれば、先生方のダイアログのスクリプトを生徒に配ってあげるのもひとつかなと思った。助動詞の後の動詞は原形ということが身についていない生徒が見受けられた。

（村井）バランスの良い授業だった。２年前マシュー先生と行ったことを思い出した。その時はマシュー先生とライティング活動をし、それをもとにスピーキング活動を行った。マシュー先生はいつもいいアイデアを出してくれて、ユーモアのセンスもあって、現３年生でもいい TT ができている。

（柴田）ダイアログが良かった。生徒たちの反応も良かった。どの活動においても事前の指示が明確たった。自分も心がけたい。最後のペアワークのところで、原稿を見ないようにしたらさらに良かったのではないかと思う。

（小林）ダイアログで伊藤先生とマシュー先生の役割のバランスが良かった。スムーズな流れの中に生徒たちも入っていけたように見えた。ウォームアップの楽しい感じやメインと関連付けているのが参考になった。リスニングで３回聞かせる上で聞き取りのテーマを作っていたのが良かった。最後のスピーキングでは、テンプレートがありマシュー先生からシンプルな文で指示があったので、生徒が自分の意見を作るのに役立っていた。マシュー先生の put trash cans の例が楽しいので、生徒も楽しいことを考えやすくなったと思う。

（高橋指導主事）warm-up の動画はどこから？

（伊藤）プラスチック協会のＨＰにあったもの。

（高橋指導主事）それを伊藤先生が translate していて良かった。指導を見てリスニングに focus している内容だと思った。リスニングは大事で、intensive listening と intensive reading が大切と考えている。生徒たちが先生のやろうとすることを理解して取り組んでいる授業だと思った。伊藤先生とマシュー先生の interaction を通して生徒が英語を使わざるを得ない雰囲気を作っていた。どうやって英語の没入体験を１時間作っていくのだろうと最後まで見ていた。最後のアウトプット活動は２年後半まで継続していくとかなり定着すると思われる。

３　改善点や今後の課題等
（高橋指導主事）アウトプットのことをよく言われるが、沢山インプットすることが大事。そのために教師が生徒に刺激を与えること。教師対生徒だけでなく生徒同士のやりとりを高め合うことで、生徒自ら調べるようになる方向に進めたい。ペアワークの質を高めることが大切。文法の説明はプライベートに行う時代になっていると思う。
　ディベートが注目されている。入試にも出題されているが、今回の授業をディベート的に考えてみると主張、理由、例という形に持っていけるのではないか。プラスチックの何が悪いのか、何をもたらすか、人間にどんな影響を及ぼすかなど、word analysis、すなわち１つひとつの語を深掘りしていくということはディベートでよくやることである。アウトプットは、ディベートだったら１分間で１００語話す練習をするとか、ライティングだったら２０分で１５０語書かせるというところまでもっていく。
　ＡＬＴの話で、日本の教師は「授業は授業」という感じで、生徒には学んだことを日常生活に結びつけるようにさせたいということがあった。生徒に自信を持たせてほしいということも言っていた。

４　指導主事への質問
（伊藤）現高校１年生は英語のレベルが低いと聞いているが、accuracy をどうしたら良いか？
（高橋指導主事）文法の error correction は訊かれたら答えるが、生徒が気づいて直すようになるまで待つようにした。あまりやり過ぎると生徒は自分を監視して自らを疑うようになってしまう。ゴールがコミュニケーション力の育成であれば、accuracy はあまりこだわらない。
（亀沢）ライティングでミスを直しすぎると生徒のやる気をなくすと言われているので 気をつけながら指導してきたが、理想としては活動の量が多くなってその中で自然と文法が直っていくことだが、それもなかなか難しいところである。
（高橋指導主事）教科書だけでは英語に触れる分量としては少ない。ただ、YouTube やインターネットで英語に浸るというのは普通の生徒ではできないこと。英検１級などの高いレベルを目指す生徒には accuracy が必要かと思うが、そうでない生徒が大半だと思う。何を目指すかによる。

令和６年度　商業科の取り組み

商業科　高　橋　　晃

今年度の商業科の１年間の取り組みについて紹介します。　　２月２日現在

●全商１級検定３種目以上合格者　１６名
　６種目取得　１名、５種目取得　３名、４種目取得　８名、３種目取得　４名
　（今年度卒業生　３４名中）
●日商簿記検定２級合格者　６名

●講習会
・日商簿記２級講習会（2/1、2）２年生１３名参加
　講師：仙台大原簿記情報公務員専門学校
　　税理士会計士学科　工藤　英一　氏

●大会出場
・秋田県高等学校ワープロ競技大会（5/25）１年生３名参加
・秋田県高等学校ワープロ新人競技大会（9/21）１年生４名参加

●イベントの参加
・『大曲商工会議所まつり』(5/18)　３年生５名参加　大曲ヒカリオイベント広場で販売補助
・『四ッ谷まつり』　(10/8)　３年生５名参加　商業科の先輩が考案したグレンさんのお菓子を完売
・『横手盆地発酵交換会』(10/12、13)横手市交流センターＹ２(わいわい)ぷらざ　３年生６名参加
・『秋の稔りフェア（大仙市地域産業祭)』(10/19、20)　３年生参加
　　商品開発（ポッポ様共同開発パン）班、販売促進（グレン）班

●商業科としての取り組み
○商業科集会（４月、１２月）
　３年生が会を運営し、実際に体験・工夫したことを１・２年生にアドバイスし、商業科での学習に対する不安を取り除き、１・２年生が今後の学校生活や進路実現に向けて意欲的に頑張っていこうとする気持ちを持たせることを目的に実施した。
○３年生課題研究、課題研究発表会（１月）
　地域企業と連携し、地域活性化活動や商業科のＰＲ活動を６班に分かれて活動した。商品開発では、地元産のイチゴジャムを使用したタルトをグレンさんと、マカロンをパティシエ・ドゥさんと、季節果物を使用したパンをポッポさんと共同開発し、学校祭および秋の稔りフェアで販売した。地域ＰＲ班は学校および駅前から学校までの周辺を歩き、飲食店のマップおよび飲食店の特徴をまとめた作品を完成させた。完成させたマップは各飲食店に寄贈した。７月の体験入学で商業科ＰＲ班が中学生の前でスライドを用いての商業科紹介を行うことができた。地域課題に取り組む班では近年幼い子供の集中力不足や発達スピードの遅延の課題に着目し、絵本の読み聞かせを企画し、集中して聞かせる活動を保育園に出向いて活動した。読み聞かせの絵本は生徒が手作りし、その絵本を保育園に寄贈した。
　昨年度からの活動である大曲商工会議所主催『ものづくり企業紹介動画』制作のリポーター役に今年も３名が協力した。大山市役所、大曲商工会議所の方々や、グレンさん、ポッポさんなど多くの地域の方々と交流し協力して頂いたことは、生徒にとってはもちろん私たち教員にとっても実学を学ぶたいへん貴重な体験となった。来年度も更に地域との交流を深め充実した活動ができるようにしていきたい。

デジタル探究について

三浦　史聖

0. はじめに

今年のデジタル探究コースの活動を振り返ると、私自身も多くの発見と学びを得ることがきた。デジタル技術を活用した探究活動を生徒たちがどのように捉えるのか、また、どのように生徒たちに影響を与えたのかを見つつ、生徒たちの成長とともに私自身も考えを深めていった。それと共に、新しいデジタルの最新技術を活用する難しさを感じる一年であった。ここでは、これまでの活動を振り返るとともに、今後の方向性を述べたい。

1. 活動の概要と取り組み

本コースは、秋田県によるデジタル教育　未来へ RUN プロジェクト事業という一貫で行われているものであり、令和４年度から令和８年度にかけて全県で１０校が指定されて行われているものである。本校では、実質今年からの活動となっており、目的としては、最新の ICT 教材や ICT 専門人材を活用した教育を推進し、これからのデジタル社会で活躍するために必要となる論理的思考力、提案力、課題解決能力、批判的思考力等を身につけた人材を育成することを目的としている。一般的な普通科の生徒との修得単位数の違いもあり、一般的な普通科の生徒が情報Ⅰ（２単位)、総合的な探究の時間（１単位）を修得するのに対して、デジタル探究コースの生徒はそれらの代替として行われるデジタル情報Ⅰ（３単位)、デジタル探究コース（２単位）となり、２単位の増単となる。

今までの探究活動の時間でも行っていたように、データを分析するための表計算ソフトの利用や、プレゼンテーションソフトの利用だけでも十分デジタル探究になるとの見方をされているが、それでは差別化がされないということから本校では、外部講師の方に依頼して、ダヴィンチ・リゾルブを用いた動画編集、Unity を使ったゲームプログラミング、NTT　DOOR のメタバース空間の構築等の最新のデジタル技術を学び、実際に２次元ゲームを制作したり、仮想空間を構築したりする経験を積んだ。また、現在授業で学んでいるプログラミング言語 Python3 の知識、そしてプログラミング技術を高めるために、冬季休業中にプログラミングの特別講義を行い、年度末に受験予定である Python3 エンジニア基礎認定試験の合格を目指している。これらのデジタル技術やデジタルツールの考え方が、生徒たちが取り組む探究活動の一助になればと考え行った。

現時点で生徒たちが行っている探究活動の例を挙げれば、学習到達状況を把握する効果的な学習を行う WEB 制作、地図情報を利用したアプリ制作、アナログとデジタルの絵画の違いを探る探究活動等がある。どれも生徒の個性が現れたユニークな発想の探究活動であり、その大部分は生徒たちの能力に依存することにより行われている。

2. 活動を振り返って

この１年間のデジタル探究コースを振り返ると、生徒たちが慣れないデジタル技術を何とか身につけようとしたりする姿勢やデジタル技術を使って新しいアイデアを形にしようとする姿勢が印象に残っている。アプリ制作や WEB アプリの開発において、生徒たちは自分たちの生活に関連するテーマを選び、生活の中で役立つものを作りたいという意識を強く持っていたように感じる。しかし、探究活動ということを考えると難しいようであったと感じる。普段馴染みのないデジタル技術に触れ、それを利用して何かしらかの作品を制作し、その上で目的を持った探究活動をするとなると明らかに時間が足りないし、また、そのデジタル技術の習得についても例えば、Unity を使ったゲームプログラミングは、高校生には難易度が高く、挫折感を感じた生徒も多く見受けられた。この点に関しては、次年度以降の課題であり、利用するデジタル技術を限定し、探究活動に重点を置けるようにした方がよいと感じている。しかし、今年度の活動においても、この経験を通じて、教育活動としては、難しい課題に取り組む中での問題解決能力や粘り強さを身につけることができたのではないかと感じている。

NTT　DOOR のメタバース空間の構築に関しては、生徒たちが仮想空間の中でコミュニケーションを取りながらアイデアを実現するデジタル技術は、難しいながらも楽しく生徒が学んでいた。生徒たちにとっては、仮想空間でのリアルタイムな共同作業や交流を通じて、デジタル技術を活用した新しい形の学びを模索する過程そのものが貴重な経験となったと感じる。このメタバース空間の活用方法は発表の場や交流の場として、探究活動に限らず教育現場での活用方法を模索していきたい。

3. おわりに

この１年間の活動を通して、デジタル技術を使うことが目的とならず、やはりデジタル技術をどのように活用して教育効果を高めるかということは次年度以降も考えていかなければならないと感じる。メタバース空間やゲームプログラミング、アプリ開発といった技術をどのように教育活動に応用していけるのか、より学習者にとって有益な体験をさせる具体的な方法を模索する必要があると感じる。そして、その目的の実現のために、指導者が日々進化するデジタル技術に精通していなければならない難しさを克服するという課題に立ち向かい続けなければならないのであろう。

情報学科が海外に比べて少ない日本が、昨今情報技術分野で後れを取っていると言われていることからも、高校生のうちから新しいデジタル技術を活用することを考え、探究活動を行っていくことができるこのデジタル探究コースは非常に有益なものであると感じる。次年度もこの活動に関わることが出来るのであれば、生徒とともに学び、より充実した時間を送れるように努力したい。